

「 さ さ え 」

2006, 1月発行 情報誌 第14号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所 / 福岡県田川市伊田4395 (福岡県立大学生涯福祉研究センター内)

TEL / FAX 0947 - 42 - 2286

E-mail npo-fukusiyounet@sage.ocn.ne.jp

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします

床ずれ予防ハイブリッドエアマット「ピーウェーブ」

P-Wave



自立支援と快適さを求めて

いよいよ、販売開始!



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

NPO 福祉用具ネットのロゴマークは明石尚典さんのデザインです。

ドイツにおける認知症への取り組み

理事長 豊田謙二（福岡県立大学教授）

新年明けましておめでとうございます。今年度は介護保険制度も改正されます。高齢化が進展する中で自立支援と介護予防の取り組みが一層重要になってきました。ドイツにおける認知症への取り組みをご紹介します。今後の介護の課題を考えてみたいと思います。

痴呆症は平成17年度に認知症と改称されました。認知症の命名は、その症状が時間や場所などを認知できにくいという「認知障害」に由来します。その特徴はとくに記憶障害において顕著です。たとえば、部分的な「もの忘れ」と「全部忘れ」の認知症との区別とともに、重度化に伴う昼夜の逆転や居場所を認知できない徘徊が出現します。その病歴は、脳血管障害あるいはアルツハイマーに起因しています。ただ、認知症という命名が「障害」のカテゴリーに帰属させるものであるだけに、その症状と「老化」との関連性を薄めることにならないかと、危惧されます。

認知症のケアを今後の高齢者ケアの中心に位置づけるのは、わが国と同様にドイツにおいても同様であります。近年ドイツでも小規模ケア施設、いわゆるグループホームの設置が増加しています。今夏に、ファイザー・ヘルス・リサーチ財団の研究助成を得てドイツを再訪し、グループホーム、老人専門病院、老年学専門の教授などにインタビューし、最近の認知症をめぐる動向についての情報を得ました。

ここでとくに紹介を要するのは以下の三点です。

2001年開所の認知症グループホーム、「ハウス・リンデンホフ」では、実験的な試みに満ち、若い施設長をもとにした意欲的な介護理論の実践には、大いなる知的刺激を得ました。まず、居住者（定員20名）は施設内において完全な自由行動が保障されています。開所当初に掲げられていた「日課」も破棄されています。それは在宅での生活に近い自由とやすらぎ、そして安全を保障しようとするものです。所内のすべてのドアが開放されて、居住者の往来を自由とするのがその象徴です。

認知症の症状の特徴のひとつは「進行性」、とはよく言われることです。ところが、この「常識」に挑戦し、認知症の患者を回復させて自宅に戻している病院長に出会うことができました。何と、認知症患者の80%を自立的な生活ができるように療養して送り返しているのです。それは、作業療法士を中心とするさまざまな種類の「セラピー」の活用によるものです。たとえば、ある女性高齢者には「動物セラピー」として猫が選ばれ、リハビリテーション後には、その女性は猫とともに「一人暮らし」の生活を再開したとのことです。

認知症は初期の発見と療養が決定的に重要と言われています。ところが、認知症の専門医は少なく、とくにホームドクターに認知症に関する知識が薄いことが問題視されています。ホームドクターには、初期症状での発見と専門的なリハビリテーション後での在宅でのアフターケアへの期待が求められています。住民の生活の一番近い所において適切な療養を受けることが極めて重要なのであります。また、専門病院とケア施設そしてホームドクターとを結ぶネットワーク支援形成に向けたプロジェクト研究も開始されているようです。

「ハウス・リンデンホフ」での居住者の笑顔とガラス張り施設の開放感、そして若い職員たちの新しい介護理論構築に向けた意欲的な姿勢が、認知症として「住まう」環境づくりへの示唆を与えてくれます。また、その示唆の多くの点がわが国での先進的な宅老所に近似していることに、改めて普遍的課題へのアプローチの共時性を看取いたします。

今年も、大山事務局長の背負う重い荷物を私たちが少しずつ支えながら、自立生活支援に向けた活動を続けたいと思います。ご支援をよろしく願いいたします。

今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」(その5)

九州日立マクセル(株)新分野開発PT長 坂田 栄二

「私は、開拓農民」… 苦難の道のりの始まり

平成14年11月1日を、皆さんも覚えておいでのことでしょう。そうです、NPOの設立記念日なのです。あの日から、もう3年が過ぎてしまいました。(平成18年4月からは5年度目の事業となりますが…)

できてからも波乱万丈でいろいろありましたが、実は できる前はもっと大変だったのです。読者の皆さんは多分ご存じないと思いますので、今日は多難な幕開けまでを暴露しちゃいましょう。何が大変だったかですって？そりゃー、素人集団が独学で企業を起こすのと同じだったからですよ！

豊田教授から、「設立の準備をしてくださいよ。」と頼まれたものの、当時はNPOをどうやって立ち上げるかの手引書も手に入らず、大山はこれまで読んだことも無い難解な法律文書を読みながら、自宅にこもってインターネットに1日中繋ぎっ放しで、資料を何百ページと印刷をして勉強をしていったのです。

しかも、このころは設立準備資金のような自由になるお金があるわけでもなく、ましてや支援者も居らず、手弁当でまさに荒地を切開く開拓農民さながらに孤軍奮闘していたのでした。

平成10年12月1日から施行された「特定非営利活動促進法」のことを、通称「NPO法」と呼んでいます。この法律は、何か社会に貢献できるようなことをやりたいが、財団や社団法人などのような面倒な手続きや数億円の基金を準備するようなこともなく、もっと自由で、簡易・迅速な手続だけで法人格(NPO法人)を持てるようにしたのがこの法律で、団体の活動を側面から支援するものなのです。

(えっつ、そんなこと知っている？失礼しました。それじゃ話を先に進めましょう。)

NPO法人となるために、この法が求めているのは、

- (1) 活動をする「ひと」が一定数以上いること、
- (2) 活動の拠点としての事務所があること、
- (3) 活動する計画・内容をもっていて、それが社会貢献活動であること、
- (4) 活動のための組織があること、

というもののなのですが、すぐにこれだけを揃えるのは大変なことなのです。

「私は、ゴキブリか！」… NPOの事務所は、台所

(1)の「活動する人」は、もともと「自分たちで考えた福祉用具を作りたい、それを広めたい」という思いの人の集まりの県立大学福祉用具研究会が母体ですから、比較的簡単に揃いました。

問題は(2)の「事務所の住所」です。何も持たない、お金もない研究会ですから、もちろん家賃は捻出できません。そこで、目をつけたのが、大学内の空きスペース。大山が相談を持ちかけたのは、生涯福祉研究センターの中藤助手でした。中藤はセンターの主(ぬし)のように隅々まで知り尽くしているので、この大山の相談に、「いいところがあるわ。私も前から目をつけていたの」と、さっさと前にたって豊田教授と大山を案内しました。

「ここはどう？」

「えーっ、ここー……」

口を丸くしたまま 絶句した大山を見ながら、中藤は(私も欲しい部屋なのよ)とでも言いたげな得意な顔。

そこは、生涯福祉研究センターの、奥まったところにある台所だったのです。台所の横には3畳程度の小さな納戸があります。しかもその台所のすぐ横はトイレです。トイレは水を流すと「ジャー…」という水洗の音が聞こえます。

大山は、納戸の小さなガラス戸に手を掛け、力任せに引いたとたん、「ガタン、ガタン」と大きな音を立てて戸の内側になにかが転げ落ち、突っかえたようです。中藤はわずかに開いた戸の隙間から、長めの棒でそれを奥へ押しやりながら、「エイッ」とばかりに戸を引き開けました。

「わぁ……！」

そこに現れたのは、学校中のガラクタを一堂に集め、^{かさたか}嵩高く積み上げられた沢山のゴミ(?)がありました。部屋の奥が見通せないほどです。附属幼稚園の時代の食器棚や鍋などイベントに使用する台所用品が足の踏み場もない程山積されていたのです。

だんだん大山の顔が、悲しそうになるのに気づいた豊田教授は、
「便利だな！ エアコンも有るし、窓も広いし、何でもそろっているぞ。」

確かに、お茶も飲めるし、すぐにトイレにも行けるので便利と言えば便利なのですが、

「まあ、初めからそんなに大きな場所は要らないし、もっと場所が要るときは、また探せばいいじゃないか。」

実に気楽な豊田教授。毎日この狭い部屋に詰めるのは大山であるのだが、大山はどうしたら部屋らしくなるのか考える気力もない。

ただ取り付けられているだけの壊れたエアコン、日に焼けて破れかけたカーテン、茶色でささくれ立った畳、どれひとつとってもそのまま使えるものはない。まともな部屋に仕上げるのにいったいどのくらいの金がかかるのか、思案にくれていた。

しばらく沈黙が流れ、大山は仕方ないなとあきらめたのが、豊田教授のほうに振り向いて、

「電話は？」

「無いよ。」

「じゃどうやってみんなと連絡取るの？」

「ケータイ！」

「ケータイ？」

「そう！ケータイ！あちこちに外出するだろう？そしたら電話は使わないじゃないか」

それを聞いた大山は、ポケットから携帯電話を取り出して、どこかに電話をし始めた。突然、目を見開き、

「あれ～、電話が通じない！」

豊田教授も電話を取り出して

「ホントだ。何で電話ができないんだ？」

電話をポン、ポンと叩きながら、叩いてみても意味無いのに、なぜか思わず叩きたくなるのだろう。

それを見て、中藤は、

「そうなんですよ。ここは電波が入らなくて携帯が使えないんですよ。」

ボソッと、申し訳なさそうに言った。

「じゃ仕方ないな。専用の電話を引くしかないな。」

豊田教授は、もうここに事務所を決めたようである。

大山は、(ここで暮らすのは私よ)とでも言いたそうに、

何度もカーテンを「ジャー、ジャー」と開けたり閉めたりして

窓の外を通る人を見ていた。

これで、事務所の住所も決まった(?)。(つづく)



ここが事務局です。

「西日本国際福祉機器展に出展、参加して」

九州日立マクセル(株)メディカルケア製品部 和氣 幸男

去る 11/13-14 NPO 福祉用具ネット様ほか、関係皆様のご支援、ご協力を頂き九州日立マクセル(株) NPO 福祉用具ネット連名のブースを構え、出展させて頂きました。弊社は「床ずれ予防ハイブリッドエアマット; P・Wave」, NPO 福祉用具ネットは介護シャワー、洗髪シャワーを出展致しました。



昨年 9 月の東京ビッグサイトの国際福祉機器展でも同一構成で出展し評価頂き、今回もいろんなお客様と会話が出来、エアマットでの寝心地、端座位の取り易さ、セルの膨縮を実際に体感頂き好評でした。開発製品の狙いや方向性は正しく、H14 年から 3 年間の基礎作り、試作、実験、評価の成果が出たものと思います。まだまだ完成度も満足いくものではありませんが、今後も関係の皆様のご支援を頂きながら改善を図り、第 2 弾、3 弾へラインアップを図る所存です。

11 月 27 日 方城町の自立支援フォーラムにも参加させて頂きましたが、福祉の町にふさわしい福祉用具の開発、お客様の健康寿命に貢献できる製品づくりを目指し、フォーラムで弊社の発表にも有りましたように、この方城町から全国に福祉用具を発信して行きたいと考えています。弊社スローガンの「和協一致、仕事に魂を打ち込み、社業の発展を図り、社会に奉仕したい」に有りますように世のため、人のため、社会のために貢献できれば企業の本望であります。紙面をお借りして恐縮ですが、当床ずれ防止エアマットに関心をお持ちの事業所、福祉団体、施設、病院、介護サービスのお店などございましたら飛んでまいりますので、ご一報をお願い致します。

「第 7 回西日本国際福祉機器展に参加して」

八夢会事務局(飯塚研究開発センター)有方 和義

このたび NPO 福祉用具ネット殿のご好意で第 7 回西日本国際福祉機器展に出展させて頂きありがとうございました。八夢会は筑豊地区の 8 社の企業よりなる異業種交流グループです。今回、(財)中小企業基盤整備機構、飯塚市の援助を得て、また松尾先生、大山理事ほかの皆様のご御指導を得て、歩行補助器を開発し、これを展示しました。



10 月 31 日に出来上がり、出展を予定していた 3 回目の試作品を評価していただいたところ、改善点が見つかり、急遽再度試作することになりました。時間的余裕がなく、展示会前日の 11 月 12 日夕刻にやっと出来上がり、第 3,4 回試作品を展示することができました。

展示会は来場者が多く活況な展示会で、改めて福祉が身近で大切な課題であること、皆様の関心が大きいことを認識しました。私たちの試作品は初めての展示であり、どのような評価を受けるのかドキドキするやら、怖いような不思議な緊張感がありました。ふたを開けてみると多くの方々に関心を持っていただき、55 名の方にわざわざアンケートの回答を頂き、感謝しています。その回答内容も好意的で、たとえば使い心地に関しては 62%の方々が良いとのことでした。また数多くの改善に関するご意見をいただき、これを参考に今後の改善を進めたいと考えています。多くの方に少しでもお役に立てる歩行補助器を世に出したいと考えていて、引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

「展示会の拾いもの」

株式会社 ワイ・エム・シー 和田 暁

「どこのご家庭にもある通常の押ボタンスイッチですが、指先がご不自由でこのボタンさえも押しづらい方がおられます。」「例えばリュウマチを患った方や指先の麻痺をされた方です。」

「そこで従来の押ボタンスイッチをこのさわらないスイッチに取替える事で解決する事が出来ます。」「手の体温の低い方、つまり義手の方、紙、本、どんな物でも操作可能です。」「さわらないから衛生的です。」「身障者のみならず健常者との共用品として使用出来ます。」以上が私のパンフレット配布時の口上でした。(さわらないスイッチ「てんとうむし物語」)

西日本福祉機器展への出展は昨年に続き2回目となりましたが、昨年と今年は来場者の層が若干異なった様な気がしました。私がターゲットとしている建築やデザイン関係の方が若干少なかった様な気がしました。でも、1回ごとの目に見えない収穫は確実にあります。

昨年は初めてで気がつかなかったのですが、通路にも「じゅうたん」が敷かれているので助かります。車椅子の人に説明する時は、膝を床につけてお話しすると目線が同じ位になり、身障者の方に威圧感を与えないで説明が出来ます。「じゅうたん」で膝が痛くなく助かりました。

私が作ったC Dスイッチに興味を持たれる作業療法の方が多く、「頂けませんか?」「作り方を教えて?」の解決策として

ついに「マニュアル」を作りました。このスイッチの押した感触は佐賀大学の松尾先生が「Good」と言われたもので、これほど複数の方の目にとまるとは思いませんでした。実は、廃品と周りにある物で作った安価なものです。皆さんも挑戦して見ませんか?メールで連絡 [wada@ymc-web.co.jp] を頂ければマニュアルを送信します。



お代は不要ですが、「何に使用した」だけ教えて下さい。

調子に乗って「スイッチB」,「C」,「D」と手作りスイッチの作り方も作成しました。

福祉介護に携わっておられる方のお役に立てれば幸いです。

=====
| **会員ひろば** | **事務局に携わり思うこと** | **松岡静代** |
| 一昨年糸田町のバリアフリー調査を手伝ったのがきっかけで、現在は内閣府からの助成を受け方 |
| 城町の地域再生計画「自立支援事業」の取り組みにアシスタントとして時々関わっております。 |
| 事務局でNPOの仕事内容を内側から見て、事務局長が担う業務量の多さに驚いています。NPO |
| O存続の為とはいえ休日返上してまでの仕事も多く体調を壊されないかと心配ですが一人体制の事 |
| 務局ではやらざるを得ないのが実情のようです。 |
| また、会員の為の研修会が年に10回程度計画されていますが参加者を集めるが大変で事務局と |
| しても苦労が絶えないようです。資金のないNPOは赤字では運営もできません。 |
| この筑豊地域において最新情報を発信し研修会では専門分野でご活躍の講師を招いての研修が受 |
| けられる機会が与えられている事を再認識し是非活用して欲しいと思います。 |
| 情報誌「ささえ」の表紙の中に「あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします」とい |
| う言葉があります。皆様が研修を受けられて、それが自分の仕事の中で活かされればNPOとして |
| は最大の喜びとなり、ひいてはNPOの元気の素になるのではないかと思います。そして時には皆 |
| 様からの叱咤激励の電話やメールが事務局へ届けられると事務局長の苦労も少しは報われるかもし |
| れませんね。 |
|=====
=====

近況報告

事務局 大山 美智江

<p>11月4日と12日2回 自主勉強会 特別養護老人ホーム筑穂桜の園</p>	<p>NPO福祉用具ネットは、筑穂町の特別養護老人ホーム「筑穂桜の園」を支援しています。会員のネットワークを活用した勉強会を開設以来これまで何度か開催してきました。</p> <p>今回は2回に分けて、理学療法士による「介護のテクニックについて」の研修会を実施しました。NPOの会員の海尾理学療法士の協力により実現できました。</p> <p>海尾さんには地域の介護の質の向上のためにいつもボランティアで協力していただいています。本当に感謝しています。地域の介護の質の向上を願っています。</p>
	<p>方城町との共催で介護者研修会2回シリーズの第1回目として開催しました。</p> <p>認知症を正しく理解することで介護者の対応の仕方も変わります。問題行動となる理由を分かろうとすることが介護のポイントであると感じました。</p> <p>研修用ビデオもとても参考になり、やさしい気持ちにさせてくれました。ふと立ち止まり深呼吸ができたような気持ちになりました。</p> <p>参加者 84名 (会場：方城町地域交流センター)</p>
<p>11月5日介護者研修会2回シリーズ 第1回 認知症について</p>	<p>9月の東京国際福祉機器展出展に引き続いて、今年も北九州市で開催された西日本国際福祉機器展にも出展しました。前頁にも感想を寄せていただきましたが「NPO福祉用具ネット」のブースとして一緒に出展していただいた(株)YMCや八夢会、九州日立マクセル(株)の皆様とともに3日間商品のPRをしました。東京の展示会は来場者が約14万人ですが西日本は4万人と規模は小さいのですが確実にブースに立ち寄って商品を見ていただけます。</p> <p>NPO福祉用具ネットが開発した、P・Wave(ピーウェーブ)の取り扱い事業所は以下の通りです。 (平成17年12月現在)</p> <p>太陽セランド(株) 江藤酸素(株)</p> <p>介護保険レンタルも可能です。皆様のご支援をお願い致します。</p>
<p>11月13日から15日 第7回 西日本国際福祉機器展出展</p>  <p>P・Wave レンタル開始!</p> 	

<p>11月27日 自立支援フォーラム 方城町地域交流センターにて開催</p>	<p>方城町における地域再生計画の事業として「自立支援フォーラム」を開催しました。</p>
	<p>基調講演とシンポジウムを行いました。皆様のアンケート内容を見て感激しました。参加者170名アンケート一部をご紹介します。</p> <p>明日に希望を持つことの大切さ、寝ることよりも立つこと、生きることに望みを持つことの大切さを学んだ。自分の人生に困難を乗り越えたすばらしい体験。もっとたくさんの人を連れてくれば良かった。</p> <p>その他たくさんのご意見をいただきました。詳しくはNPO福祉用具ネットのホームページに掲載しています。</p>
<p>12月3日 介護者研修会2回シリーズ 第2回 脳血管障害のリハビリテーション</p>	<p>介護の現場で一番多く遭遇する、脳血管障害に伴う片麻痺や言語障害や嚥下障害などについての研修会を企画しました。理学療法士や言語聴覚士からのわかりやすい講義をしていただきました。</p>
	<p>とくに、言語障害について失語症と構音障害の違いは是非知っておきたいことです。</p> <p>また、力による介護ではなく技術で介護をするためにはボディメカニクスを理解し、利用者の残存機能を助ける介護が大切であることを学びました。</p> <p>参加者49名（会場：方城町地域交流センター）</p>

今後の研修会予定 *日程が変更になりましたのでご注意ください。

日程、会場が変更する場合がありますのでご了承下さい。その場合は申込者には連絡いたします。

所定の申込み用紙でお申込み下さい。

日程	内容	会場
<p>1月28日土曜日 13時30分～15時30分 介護者研修会 申込締切 1月20日金曜日</p>	<p>「医療依存度の高い利用者の 在宅ケアのポイント」 麻生メディカル(株) アップルハート訪問看護ステーション 所長 是松 きく彥 先生 対象者:在宅介護に携わる方など</p>	<p>会場:福岡県立大学内 受講料 個人・団体会員 1,500円 賛助会員 2,500円 非会員 3,500円 学生 300円</p>
<p>2月18日土曜日 13時～16時 ケアプラン研修会 申込締切 2月10日金曜日</p>	<p>「住環境整備とプランニング」 ～ICFの視点を取り入れて～ 福岡市立心身障害福祉センター 理学療法士 松野 浩二 先生 対象者:ケアマネージャー・ケアマネージャーを 目指す人、介護職・看護職など</p>	<p>会場:福岡県立大学内 受講料 個人・団体会員 2,000円 賛助会員 3,000円 非会員 4,000円 学生 300円</p>